
茜ヶ原緑青と赤と緑と青の方法論

暮菱葛葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茜ヶ原緑青と赤と緑と青の方法論

【Nコード】

N7426M

【作者名】

暮菱葛葉

【あらすじ】

私立石動学園高等部一年九組出席番号一番、茜ヶ原緑青。

彼の所属する活動内容不明の部活、『図書委員会執行部』には、忍と魔女と吸血鬼！？

方向性未定の学園ノベル、ここに始まる（始まらないください）！

ブログ（前書き）

駄文ですがしばしお付き合いを

不定期更新ですがご容赦ください
どうせ誰も読みませんよ、こんなの

プロローグ

「全く、こんなに凡人が精一杯生きてるっつーのに、世界はそんな
ん知ったこつちゃねーんだぜ」

「お前は多分凡人じゃないけどな」

「知ってるよ。俺は天才さ。これ以上なくこれ以下もなくどうし
うもない程に、な」

「はあ……。そうかそうか。それに比べて俺は自分がとてつもない
凡人だと信じて疑わないね」

「そりゃ買い被りだ。お前の何処が凡人なんだよ」

「じゃあ俺は人間じゃないんだな」

「ご名答。その通り。お前はいつもいつまでもいつまでも人
外さ」

確かにあいつはどうしようもない程に天才だった。

天才過ぎてどうしようもなくなって、それで。

世界に干渉し過ぎた当然の報いなのだろう、仕方がない。世界と
はその程度のものだから。

じゃあ俺は？

世界に必要な凡人。

世界に不適合な天才。

どちらなのだろう。この水面に映った鏡の向こう側は

「起きろ。……起きろー。」

「……………このあたしが起きろつつてんのが解んねーのかっ!!」
もうつららかな春とはい言難くなってきた、というか普通に暑くなってきた五月二十三日。ついでに言えば月曜日。もっと言えば午前七時四十三分。俺、即ち石動学園高等部一年九組出席番号一番、あかねがはるくしちゅう茜ヶ原緑青は姉に叩き起こされて目覚めた。

より正確を期するなら、蹴り起こされた。背中にドロップキック。しかも二度も。ドメスティックバイオレンスもここに極まれり、つて感じの激痛が全身に広がる。

なんとなく体がだるかった。全身が鉛どころか水銀みたいな。姉が一旦自分の部屋に戻ったのでもう一度布団に潜る。

「あー。まさか本気で蹴るとは……。痛てえよ」

もう五分くらい寝たかったが、さすがに木刀を持って戻って来た時点で飛び起きた。

「春眠焼を覚えず、だよね」

微妙に間違った、というかなんか怖い台詞を呟いてにやりと笑う我が姉。

大抵の格闘技（柔道と空手と虚刀流）はかじった俺も、剣道三段の木刀なんか食らったら真つ二つだ。「……解りました解りました解りましたっ！」

解の字がゲシュタルト崩壊を起こす勢いで起きた。

「ふーん。ご飯作ったから降りて来てねー。」ゆるゆると手を振りながら、さっきまでの激怒が嘘のように、背を向けてあっさり階段を降りていく。何にせよ解いはいされることだけは防いだようだ。

剣道三倍段・姉が落ち着いた後、その姉が作った簡単な朝食（味はまあ、正直言えば美味しかった）を済ませ、全力でダッシュ。とはいえ、学校は家から徒歩五分、つまりは目の前なのだけど。

なんとか遅刻することなく学校にたどり着く。

愛すべき我が母校、石動学園。中高一貫校だけあって、かなりの敷地面積を誇っている。

勉強は言うまでもないが、部活も運動部、文化部問わずかなり優秀。

野球部は甲子園の常連。 サッカー部はワールドカップ選手を続々輩出。

吹奏楽部はちょっとしたオーケストラなんて足下にも及ばない。このぶんだと、帰宅部だって全国大会とかに出場していてもおかしくない（いやおかしい）。

何を隠そうこの俺も、その部活の為にこんなに走っているのだ。その野球部がランニング中で百メートルはあるだろう列を作っているが、割り込んでぐり抜ける。学校に着くと、教室に荷物だけ置いて早速部室へ。途中、同じクラスの男子二人組とすれ違った。軽く挨拶して通り過ぎる。向こうは、登校して早々教室を出て行く俺を訝しげに見ていたが、どうせ一限は単位を落としても大丈夫だ。そこは計算している。というか、一限の担当教師はうちの部の顧問だから、必然的に自習だし。

その後も同じような視線を浴びながら、部室（と言っても、生徒数が少なくなって使わなくなった三階の空き教室だけ）に無事に到着した。

時計を確認すると、もう八時。

「……あちゃー」

みんな来てるな。九十九里くじゅうひかりはともかく、八崎やしまきとか逢魔刻おつまがときに怒られませんよーに、と扉を開ける。

教室内はがらんだった。

……えーっと、あれ？ 誰もいない？ 教室間違えた？ ……待て。落ちて着こつ。どうも今日は頭がすっきりしないな。深呼吸深呼吸。

がつん。

頭に走る鈍く重い衝撃。

「っ痛ったぁ……!!」

何奴。あ、あれか、俺の暗殺を目論む敵の間者か。

「ごそごそ音がすると思ったら。お前か。私の部屋で何をしている。
茜ヶ原」

振り向かなくとも十二分に判別がつく、よく通る綺麗な声。

「ああ、おはようございます、黒崎先生」

部活の顧問で、一年九組担任でもある黒崎蓮華^{れんか}先生。そして俺を
『図書委員会執行部』なる活動目的不明な部活に引きずり込んだ張
本人でもある。

どう見ても俺と十歳違わない若々しい美貌と、冬でも着ている浴
衣、それと俺を背後から殴打した凶器であるところの大きな鉄扇が
トレードマーク。

……っかここあんたの部屋じゃねーよ。

「で。茜ヶ原。何をしていると訊いている」

言葉が細切れた。本気で怒ってる。

「今日は。朝は部活はない。昨日言っただけだ」

「えーっと。そうでしたっけ？」

そんな話あったかな、と多分今の一撃で脳細胞の八割が六道輪廻
の旅へと旅立っただろう頭を働かせる。

「……。お前という奴は。八崎あたりの爪の垢でも煎じて飲んでい
る。まあいい。授業だ。戻るぞ」

そんなに授業を自習にばかりさせられないだろう、理事長に怒ら
れてしまうからな、と先生は今日初めての笑顔を見せた。魅力的な、
ただしつや消しの笑顔を。

はあ。今日は何の日なのだろう。朝からこんな目に遭うなんて、
第一話が最終話くらいのもんだ。死ぬのかな、俺。

残りわずかな脳細胞を無駄な思考に使いつつ、先生に付いていく。

その後茜ヶ原緑青がどうなったのか。プライバシー保護の観点から伏せておこう。ただ、しばらく俺のニックネームが「転校生」になったことだけ言っておく。

002 茜ヶ原緑青と蝦夷グリーンランド（前書き）

やっと続きの投稿になります。

002 茜ヶ原緑青と蝦夷グリーンランド

放課後。部活の時間。

[illegible]

不愉快な笑い声が聞こえる。部室の扉を開けると、案の定九十九くじゅう里くりだった。

一年九組出席番号九番、九十九里九隠^{くおん}。クラスメイト。なのにいつも俺より早く部室に着いている。銀髪逆毛。大量のベルトポーチを装備しているのが特徴。ちなみに中に何が入っているのかは知らない。

今日は朝からずっと笑っている。というのも、

「……五月蠅い、九十九里」

「応、来たか、転校生！」

というわけである。

……そんなに俺の遅刻が面白いか。

教室を見回すと、朝とは違い、部員は全員集合していた。

「そんな呼び方は良くないですよ、九十九里さん。いくら茜ヶ原さんだって転校生なんて呼ばれたら怒りますよ」

一年八組、他クラスなので出席番号までは知らない八崎鉦花。やつぎき　なたか　からず鳥の濡れ羽色の、俺の姉に負けず劣らず長い髪。日本人形のような、整った顔立ち。スカート長めの制服。物騒な名前とは結びつかない、典型的な優等生。確かクラスの委員長。

「でもさでもさ、アカネくんの失敗ってなかなか無くて面白いよね」

そう言ったのは一年七組、同じく出席番号不明、逢魔刻手首。ツインテール。くりくりとした目。制服は、長めの上着に短いスカ―ト。頭には魔女みたいな帽子を載せている。八崎とは対照的な外見。「……………」

そして俺、茜ヶ原緑青。

四人揃って図書委員会執行部。いやこれは部活とかじゃねーよ。動物園かなんかだろ。

「で、今日は何するんだ？」

「それがな、黒崎ちゃんがいねーのよ、で、二人と話してたわけ」

「嘘だー。九十九里はずーっとアカネくんの悪口言ってたんだよ」

あつさりバラされる九十九里だった。あと逢魔刻、アカネくん呼ばわりは止める。

「それで、四人揃ったら話し合いをしようと思ひまして、茜ヶ原さんを待っていました」

どうも要領を得ていないが、まあいいか。どうせ先生の思い付きでできた部活だし。活動なんてあってないようなもんだ。

「で、どーすんよ転校生」

「転校生言つな。」

……別に、俺が決める話じゃないだろ」

「どーすんよ」

両手を挙げて肩をすくめる九十九里。

「どうしよー」

ツインテールの毛先をいじりながら首をかしげる逢魔刻。

「どうしましょう、この子」

唇に人差し指を当てて、考えるような動作をする八崎。

一様に困る図書委員会執行部員たち。こういう場合、帰ればいいのに　　つて、『この子』？

「八崎。今『この子』って言ったか」

「はい、言いましたけど……」

改めて教室を見渡してみると、ここで初めてもう一つの人影に気付いた。

教室の後ろ、ロッカーの辺りに人間がいた。年は多分十歳くらいだろう。あんまり背は高くない。っていうか、なんで高校に小学生が。今は五月下旬。普通に授業があるはずだけど。

「えーっと、茜ヶ原さん、この子、蝦夷グリーンランドさんです」

蝦夷グリーンランド？ およそ人の名前とは思えない。九十九里

九隠とか八崎鉦花とか逢魔刻手首とかがまだマシに思えてくる。

「アカネくん、今、失礼なこと考えたよね」
「バレたか。当然だけど。」

「で、この子供をどうしろと？」

「しばらく預かって欲しいそうです」

「は？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7426m/>

茜ヶ原緑青と赤と緑と青の方法論

2010年10月8日14時21分発行